



社会福祉士 畑山 賢二です。

元気にな～れ

287

認知症を理解する

～介護は誰もが直面する問題です～

認知症になったら本人や家族にとって大きな衝撃だと思います。

自分の中の記憶や判断力が徐々に無くなっていく恐怖と、大きな喪失感をもたらします。ゆっくりと経過するだけに恐怖の時間が長く、苦痛に満ちたものになるのかもしれません。

介護していく上で大切なことは、心理的に孤立させることなく、症状の進行に合わせて共に歩んでくれる支援者を持ち、いかに初期の不安や困惑の期間を短くして早期で安心できる(安心する理由はさまざまです)環境をつくること、その後の症状の進行を遅らせるための最大のポイントとなります。また、認知症は下記のとおり進行するにつれて症状が変化していきます。

●初期 (軽度)



自分でも「何となくつじつまが合わないこと」に気づき、そんな自分に対して自信をなくすことが増えてきます。自分の情けなさに落ち込み、忘れることに対するの憤りを覚え、この先自分がどうなっていくのかという恐怖から不安が強い時期です。かつての本人とは「別人」のような言動や行動がみられたり、興味を示していたことに無関心になり、周りからは「なまけている」ように見えたりします。また取り繕ったようなつじつま合わせが多くなるのも特徴です。

●中等度



周囲が困惑するような症状や行動が出やすくなります。障害されて働かない部分がある一方で、まだ障害を受けておらず正常な働きをする部分があるため、何とかつじつま合わせをしようとしませんが周囲は言い訳に聞こえるため、本人を怒りがちとなってしまいます。また慣れ親しんだ環境から離れると混乱しやすくなります。

●重度



周囲との意思疎通性がきわめて困難、あるいは不可能になります。理解力や認識力はなくなりますが、感情は残っていることに配慮しなければなりません。何について叱責されているかは理解できないのに、叱責された時の不快感だけが残り、認知症状が悪化してしまうことがあります。

上記はあくまでも「一般的な症状」であり、認知症の種類などにより個々に違います。認知症の方と正しく向き合うためには、「認知症は“病気”であり、“種類によって経過が異なる”」ことを理解していなくてはなりません。

次回の私の記事では、“認知症の方の接し方の原則”について掲載したいと思います。

